

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アジア読本モンゴル

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4582

ゆさぶり

希望と不安のはざままで

内田敦之

●ミュージック・シーン

露のように澄みきった光を放つ星が輝く

一晩中あこがれ恋いこがれて夢を見るよ

水晶のようにキラキラ輝く黄金の陽光の中で

初デートで彼女を待つような感じ

ああ、ボクの一八歳

二度とやって来ない永遠にかがやく日々

自分だけの秘密、輝く希望の中で

自分だけが知っている顔を思いうかべて

夜明けに彼女の紅い唇でキスされる夢を見、

目を覚まして恥じらう

ああ、ボクの一八歳

二度とやって来ない永遠にかがやく日々

一九九六年四月、はじめてのソロ・コンサート「アルワン・ナエマン・ナス（一八歳）」を開き、若者を熱狂させたグループ、カミルトンの大ヒット曲「一八歳」の歌詞である。モンゴルの若者に言わせると、一八歳という年齢はキラキラと輝くもっともすばらしい時期なのだという。モンゴルでは観客が立ち上がることは珍しいが、このコンサートでは総立ちになったそうだ。

カミルトンのメンバーは、リーダーのD・ボルド（この時一八歳）、L・ガエルデン（二〇歳）、B・エルデンバト（一九歳）、G・メンドアマル（二七歳）の四人である。「一八歳」コンサートの前後には彼らのインタビュー記事が新聞に掲載されたが、その受け答えを見ると、茶目つ気たっぷりで夢を語るごく普通の大学生たちである。ルックス優先の日本のアイドルと比べると、カミルトンはファン自らが「ツァライ・モータイ（フ男）」と言う



カミルトン。

ほどだ。歌もずば抜けてうまいとも思えないが、それでもモンゴルのポップス黎明期にあって、歌って踊れる四人組がはじめて出てきたことが、大ヒットの主たる原因になったのだろうか。日本人留学生の中にも熱狂していた人がいた。まさに時の人、アイドルのはしりとでもいうべき存在である。

モンゴル国は人口が極端に少ないので、スターといっても驚くほど身近な存在である。「ああ、彼女だったら友人の友人だよ」とか、「あのバンドのボーカルは私の親戚です」とか、そんなことがけっこう多い。

ディスコのゲストとして舞台で歌っていたかと思ったり、ホールに下りてきていっしょに歌ったり踊ったりす

るような、人なつっこいモンゴル人の性格もそうさせる一因になっているようだ。日本のスターのようにほとんど神格化された遠い存在ではなく、スターと観客との関係がちよっとイイ感じなのだ。

モンゴル国のロック・ポップス・ベスト一〇を見ると、ハル・サルナイ(黒バラ)、ハラシガ(ドラ)、スンス(魂)などのバンドやタイワンベツト、アリオナーなどのソロ・シンガーが名前を連ねているが、モンゴルのミュージック・シーンを語るさい、やはり忘れてならないのは、知名度、人気、実力ともにナンバーワンの「サラ」ことB・サラントヤである。ポップスを歌って良し、バラード良し、民謡良し、とレパートリーも幅広い。

サラは、長くバンドのボーカルとして活躍していたが、最近はソロ活動が多くなった。一九九五年秋にはシングルポール録音のCD「イネームトギー・フン(SMILING MAN)」を、一九九六年春には「アラググイ・アムラグ(The Inseparable Lovers)」をリリース。タイトル曲もそうであるが、このアルバムには民謡も何曲か入っている。

モンゴルでは若者の間にも民謡がすっかり息づいてい

る。モンゴル人は宴会で酒を飲むと、よく歌を歌うが、ポップスよりはむしろ民謡の方をよく歌うようだ。モンゴルの宴会に出るなら、一曲や二曲のレパートリーがないと気まずい思いをするかもしれない。宴席で一曲披露すれば、拍手喝采、アンコールの嵐まちがいなしである。牧民は馬上でよく歌を歌う。広大な草原で風に吹かれながら思う存分歌うのだ。モンゴルの歌には、そんな草原の広がりや風の音やにおいがいっぱい詰まっている。

若者が聞く音楽にはもちろん恋心を歌うものが多いことはいままでもない。ただ、それとともに母や父をテーマにした歌(やはり母の歌が多いが)もよく歌われる。日本の若者が聞く音楽は、ほぼ百パーセント恋愛がテーマになっていることを考えると、何とも不思議な感じがする。モンゴル人の親子関係のあり方が反映しているのだろう。親子の絆は日本人よりも強いかもしれない。

さらにこれは若者だけに限らないが、モンゴル人は望郷の念も強い。日本人が海外で日本を思うとき、その便利さや快適さがかなりのウェイトで入ってくると思うが、モンゴルは物質的にも豊かでないし、「先進国」といわれる国々と比べて便利さや快適さも落ちる。それにもか



サラントヤ。

かわらず、海外に暮らしているモンゴル人のノスタルジ
ーは、日本人にはちょっと想像できないほど強い。モン
ゴルの歌詞にはそれがよくあらわれている。ただ気にな
るのは、そんな素晴らしい故郷も、これからは自分たち
が意識的に守っていかなければ失ってしまうことになり
かねない、そんな時代が到来しているということ在未来

を担う若者がどれだけ認識しているのかということであ
る。

●週末のディスコ

レストラン、食料品、電化製品など多くのチェーン店
を展開しているジェンコ社のディスコ「ハリウッド」
(モンゴル語では「ゴリウッド」という)に行く。モンゴルの

店はほとんどそうなのだが、うらびれたビルの外側には何の表示も看板もなく、ビルの中へ入っても「こんな所にディスコがあるのか」という感じである。さらに階段を上がっていくと、やっと「ディスコ」という控え目な表示があるが、入口もずいぶん地味である。ところが、その中に入るとビルの外観からはとても想像できないようなディスコが忽然と現れる。規模は小さいがライティングも立派で、音楽は最新のヒットチャートがガンガンかかる。

これは、ウランバートルでは、香港のスターテレビやMTVなどが、普通のチャンネルでも週に二―三回、最近普及しつつあるケーブルテレビと契約すれば二四時間自由に見られるようになったこととも関係している。踊っている年齢層は、大学生を中心に高校生から上は四〇代ぐらいの人まで。また、週末になると、日本人の若者を中心に外国人が集まり、ウィークデーの疲れをいやし、大いに楽しんでる。営業は九時頃からだ、客がテール、ホールにあふれて盛り上がってくるのは大体深夜になってからだ。イベントももりだくさんで、人気バンドのライブ、歌合戦、ダンスショー、腕相撲大会、さら

にストリップまである。このごった煮的ふんいきのまま、閉店の四時（または五時）まで大いに盛り上がる。これがたったの五ドルで楽しめるのだ。ちなみにソフトドリンクは二ドル、ビールでも三ドルほどである。

一九九五年頃からブームにのって、ディスコが次から次へとオープンした。シンガポールと合弁の「シーモ」は、二階席のテラス形式をはじめととり入れた。ホールの広さをもっとも大きい「カメレオン」は、他のディスコより入場料を安めに設定し、ワン・ドリンクも付けたので学生の人気を集めた。さらに「ハリウッド」と同じジェンコ系列の「モトロック」は、店内にオートバイやタイヤなどのパーツをインテリアとして使い、二階のテラス席もあり、いま人気ナンバーワンのディスコである。その他、ウランバートル市内には、「ウランバートル」「バヤンゴル」などのホテル内に、また「エモン・クラブ」などの「ボール（バー）」と呼ばれる場所がいたる所にある。ここは通常でも音楽がうるさく、何度音量を下げろと言っても、いつのまにか上げてしまう。そのうち「こういう場所なのだ」と受け入れるほかなくなるが、とくに深夜をすぎるとボールはディスコと化すので、ど

こでも耳をつんざくような大音量で音楽をかけているところが多い。あの静寂につつまれた草原から出てきたモンゴル人たちが、(実際には民族衣装を来た本当の遊牧民を見かけたことはないが)この騒音の中でどうして座っていられるのか、あの遊牧民とは別の種類の人たちがいるのではないかと思われるほどだ。

外国人のわれわれから見ると、その圧倒的なパワーに「若者文化の中心はディスコだ」と錯覚してしまうかもしれない。しかし学生は学業の方もけっこう忙しく、また入場料の五ドルやドリンク料は普通の学生にとってそれほど安い値段ではなく、ディスコ通いをしている学生は実際にはそれほど多くないようだ。

ディスコに入ったついでに、若者のファッションに目をやると、思いのほかみんなおしゃれに着飾っている。一九九六年夏、女の子の間ではへそを出したファッションに人気があったようだ。ハッとさせられるモデルのような女性も見かける。もともとロシア経由でヨーロッパ風のファッションに親しんでいたことも影響しているの
だろう。

とくに民主化後はスターテレビ、MTVなどの番組、

さらに欧米の最新の映画が自由に見られるようになった(日本で公開されたばかりの映画がすぐにレンタルビデオに並ぶ。

ロシア語で吹き替えした海賊版がどんどん入ってきている。ここでは情報の速さに驚かされる)ことも影響して、若者のファッション・センスはどんどん磨かれている。

●心の病

最近、自殺が増加していると聞いたので、若者にこのことを聞いてみたが、「考えたことがない」という答えが多かった。なかには「エーッ。神様、仏様……」などと絶句して、驚きと戸惑いをあらわにする者もいた。だが、自殺は社会問題になりつつあるようだ。

ある新聞記事によると、一九九一年以前はそれほど変化がなかったが、一九九二〜九三年に激増、一九九四〜九五年は減少したものの、一九九六年、ふたたび増加傾向にあるという。自殺者の四〇％は二六〜三五歳であるというが、一五〜三〇歳の年齢層が大部分を占めているという統計もある。そして自殺者の三分の一が失業者、三〇％は酒を飲んで酔っぱらっていたという。自殺の原因は、家庭不和がトップで三四％、次いで、アルコール、失恋、生活困窮、借金などである。

民主化以降、価値観がひっくり返り、うまく時流にのれない若者の間で不安が広がっている。そして、そこに宗教が入り込む余地が生まれている。モンゴル国は仏教とイスラム教（西部のカザフ人を中心）が主要な宗教であるが、近年、外国からさまざまな宗教が入ってきて、メディアにもときどき登場するようになった。一九九五年一〇月、キリスト教関係の一五―一八歳の五人が睡眠薬を大量に服用して自殺をはかる事件が起こったという。自由になったと言われるが、注意して見ると若者が自分でものごとを判断するための情報が、まだまだ制限されているように思われる。

●自信の裏表

モンゴル人は自負心が強いようだ。「モンゴル人は能力があるばかりに、まじめに働かず、国家の発展が遅れている」ということを平気で口にする若者がいる。たしかに優秀な若者はいらぬ。才能にあふれ、心から尊敬できる若者もいる。しかし、これまでモンゴル国が何とかやってこられたのは、かつてはロシアからの、現在は世界各国からの援助が大きく作用しているということ忘れてはならない。

ある日本人は、モンゴルの若者は、ほめそやされて育てられるため、自分の非を認めない、常に自分を正当化する傾向が強いと言った。さらにモンゴル人を「ほめれば自惚れ、批判すれば不平をいう」という辛辣なことは表現した。モンゴル人ときあつていると、ときおりこの自負心が気になることがある。

選挙がおこなわれると、有能な若い人たちが国会議員として多数選出される。彼らがこれからどんな政治をしていくのか。本当に能力のあるすぐれた若者に平等な機会が与えられるようになるのかどうか、この国の未来を大きく左右するはずである。

モンゴルには世界に誇れるものがたくさんある。それでも実際に暮らしてみると、政府や役所のシステム、生活環境、日々の暮らしの安心感などまだまだ遅れている点もたくさんある。土地も資源もあるかもしれないが、うまく活用できなければいけないのと同じである。

彼ら、若者の活躍に大いに期待したい。

援助から投資へ

コラム

ルハグヴァスレン

民主化の流れを受けて、モンゴル

国の博物館も刷新されることになった。ウランバートル市にあった中央博物館は、恐竜を目玉とする自然史博物館となり、歴史・民族部門は独立して、かつての人民革命博物館へと移転した。これにもなつて歴史博物館の館長となつた私は、ちょうどこの頃から文化無償という枠組みでの援助を日本から受けるために努力することとなつた。

日本の友人の協力を得てせっかく書類を準備しても、モンゴル側でなかなか理解してもらえなかつた。当時の人びとの意見はおよそ次の三つ

に集約される。

一、日本は小国に援助するが、それは必ず政治的な目的を持っているから危険である。

二、日本は小国に援助するが、必ず取り返す。一ドル援助して二ドル取り返す。だから危険である。

三、日本は小国に援助しないから、援助の話はでたらめである。

援助には当然、政治的な意図も経済的な目的もあるが、いずれにせよ、人びとは資本主義国からの援助についてかなり警戒していた。

また、社会主義時代に、援助は他人が勝手にしてくれることだという

理解が身についていて、自分で考えることを放棄していた。

最近になってようやく、支援を得るためにはまず自分たちで立案し、書類をそろえるのだとモンゴル側も認識しはじめたと思う。しかし、今では援助より投資が合言葉になっている。

モンゴルで投資というとき、それは外国から資本を導入することを意味している。そのための受け入れ態勢を準備するのは自分たちだということに気づいている人はまだ少ない。

民主化が問うジャーナリズムの本質

松田忠徳

●七〇年ぶりの「自由出版」

モンゴルの民主化運動は、言論・出版の自由と同時進行してきたといつて過言ではない。社会主義時代には、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ等のいわゆるマスメディアは、いっさい一党独裁のモンゴル人民革命党（共産党）と政府の政策を宣伝する重要な手段として、党の厳格な検閲の下におかれていたからだ。記者が書いた記事は、五段階の検閲を経て初めて活字になった。だから一九八〇年代までは、この国で発行されるどの新聞を読んでも、内容的にはほとんど違いはなかった。

当時、最大の発行部数を誇る新聞は、旧ソ連の「プラウダ」に当たるモンゴル人民革命党の機関紙「ウネン（真実）」だった。発行部数が二〇万部を超えていたといわれるから、総人口の約一〇％が購読していたことになる。その「ウネン」の元記者O・ツェデンドルジが、一

九九一年一二月に『死の敷居を歩いて』という手記を出版し話題になった。彼は検閲を受ける前のオリジナル原稿を、何年も日記帳に書き記していて、そのことを密告され、逮捕された記者として知識人の間に知られていた。もちろん彼は反体制記者として、ただちに投獄された。民主化後、自由の身となり、この本を出版したのだが、その直後、入院先の病院で死んだ。死因は不明だ。このように、かつて「反体制」の烙印を押された人物が、民主化直後に殺害されたり病死した例は少なくない。

一九九〇年四月八日は、モンゴルの新聞にとって記念すべき日となった。この日は、モンゴル民主化の中心勢力「民主同盟」の機関紙「アルドチラル（民主化）」が創刊された日である。つまり印刷用紙と印刷所が、ほぼ七〇年ぶりにモンゴル人民革命党の支配から離れた記念的な日であった。

続いて社会民主同盟の「ウグ(言葉)」、民族進歩党の「ウンドスニー・デブシル(民族の発展)」、緑の党の「ユントントツ(宇宙)」等が創刊された。「ウネン」も、人民革命党の機関紙として、発行部数を大幅に減らしながらも依然として健在だ。一方、「ウネン」紙に代わる政府系の新聞として、「アルディン・エルフ(国民の権利)」「ザスギン・ガザリイン・メデー(政府ニュース)」が登場した。「ウネン」「フドゥルムル(労働)」「オトガ・ゾヒオル(文学)」等のように、社会主義時代から継続して発行されているものも含めれば、一九九〇年春の民主化以来、二年間で三〇〇種前後の新聞・雑誌が発行された



1990年4月8日、69年ぶりに発行された共産党の検閲を受けない新聞「アルドチラル」。新聞を持っているのは、エルベグドルジ編集長。バックのポスターは、反体制詩人チヨイニヤムの肖像。

ことになる。その多くは、題字に「自由出版」の文字を誇らしげに掲げていた。検閲を受けない出版物という意味である。

その「自由出版」の旗手「アルドチラル」は、創刊当初の発行部数が一〇万部で、利益もかなり出し、「民主同盟」への資金援助もしていたという。当時は政府が無償で新聞用紙を支給してくれたらしい。ところが新聞の数がふえたことと、国内にまったく製紙工場がないためもあって、価格が急騰してしまった。「民主同盟」と「民主党(現在の民族民主党の前身)」の機関紙としてスタートした「アルドチラル」が半年後の一九九〇年秋に「党の利益ではなく、国民のためにモンゴルで第一号の民間の新聞を発行しよう」と独立した頃、新聞用紙代は一ト六〇〇〇トゥグルグだったが、わずか二年で一〇倍に上がった。この新聞用紙の急騰が、結果的に人民革命党政権のマスコミ支配による新たな独裁を生むことにつながった。

●非共産党新聞「アルドチラル」の大スクープ

「アルドチラル」紙がその存在をモンゴル中に強く印象づけたのは、「首都ウランバートルの北東六〇〇キロの

マルダイで、ソ連（当時）が過去二〇年間、密かにウランを採掘していた」という大スクープによってである。

これは人民革命党の一部の幹部にしか知らされていなかった事実だったという。モンゴルの民主化運動は、「脱ソ」、つまりソ連からの独立の性格を帯びていただけに、「アルドチラル」のスクープは、民族意識を高揚させるうえで大きな意味をもっただろうことは想像に難くない。にわかには信じられないことだが、モンゴルは独立国にもかかわらず、その豊富な地下資源の管理権はソ連にあった。その後の公式発表では、ソ連は年間一〇万トンのウランの鉱石を採掘していたというが、その数字の信憑性はないといってもいいだろう。なお精錬もロシア人が現地でおこなっていたようだ。

かつてのソ連を中心としたコメコン諸国の援助で建設されたモンゴル第三の都市、エルデネットにある政府自慢の銅・モリブデン・コンビナートが赤字だとすっぱ抜いたのも、「アルドチラル」だった。

このように民主化後のモンゴルの新聞は、すっぱ抜き合戦によって、言論・出版の自由を謳歌しはじめていた。社会主義時代のモンゴルを四〇年間も独裁したツェデン

バルに関するものをはじめ、政治家のものが多い。なかでも驚くべきことは、公安当局に保管されていた公文書・秘密文書の類が外部に大量に流出し、新聞の特ダネとなるケースが多いことだ。こうした健全さはいかにもモンゴルらしい。アジアとはいえ、ヨーロッパ式の思考方法が身につけているモンゴルならではの発想に違いがある。つまり公安当局も積極的に内部資料を放出しているということだ。

その最たる例が、「民主化の星」として、当時、連日のようにモンゴルの新聞に登場した反体制詩人リンチニー・チョイニヤム（一九七九年に四三歳で没）の作品だろう。公安当局に押収され、発禁とされていたチョイニヤムの詩が大量に公開されたのである。四〇年にも及ぶツェデンバルの独裁下にあつて、「抹殺されていた」詩人チョイニヤムは、地下でモンゴルの腐敗し切った社会主義を批判する詩を書き続けていた。もちろん、それらはいっさい活字になることはなかったが、彼の詩は手書きでモンゴル人に密かに回し読みされていたようだ。

だが、ツェデンバルを、社会主義を批判することは、死を意味していた。「鎖国」状態にあつた鉄の壁のモン

ゴルから、チョイニヤムに関する情報が国外へ漏れることはなかった。チョイニヤムは病の身で投獄されながらも、ついに筆を折らず、四〇そこそこで逝った。死後一〇年目にしてようやく活字になった彼の詩集は、まさに命と引き換えに得た“民主化”の賜物だったといえる。もちろんその詩の多くは、公安当局が押収していたものだ。人口二二〇〜二三〇万の国で初版の発行部数五万という数字は、モンゴル人の民主化に対するのっぴきならぬ“決意”の表れでもあったと見てとることができぬ。

公安当局が公開した資料といえは、チョイニヤムが国家反逆罪で四年間、強制労働収容所に収監された時の裁判記録もある。これもモンゴルのジャーナリズムの“手柄”といってもいいだろう。それは『チョイニヤム・冤罪』という一冊の本にまとめられた。

検事「あなたの詩句に『尊敬する友は破壊してない／この時代が破壊した』とあるが、説明しなさい」

チョイニヤム「私が生きている時代が、私を破壊したという意味です」

検事「『この時代』とは何か」

チョイニヤム「社会主義体制です」

●中傷とデマがお家芸

民主化直後の一九九〇年から九二年にかけて、三〇〇前後もの新聞・雑誌が誕生し、その数の多さがとりもなおさずモンゴルの“民主化”の盛り上がりの高さを証明していたのだが、一方でその反動も大きかった。つまり“自由”の意味の取り違いである。取材対象者の人権を無視したたれ流し記事が新聞の主流となったのだ。例えば日本での芸能人をターゲットにした週刊誌のゴシップ的な記事が一般紙に堂々と掲載されるからたまらない。しかも始末が悪いことに、取材をしたり裏をとることは皆無に近い。“人権”のなかったモンゴルでは、“自由”には責任が伴うことが理解できなかったようだ。売れさえすればいいのである。

テレビのワイドショーがないモンゴルでは、新聞の多くがいつのまにかゴシップ新聞と化してしまった。中傷・デマ記事によって、名誉を失ったモンゴル人は数知れなかった。七〇年もの社会主義の歴史を持つモンゴルでは、活字メディアの力はわれわれが想像する以上のも

のがある。つまり市民の多くが、スキヤンダル新聞はあくまでも「スキヤンダルに過ぎない」と気がつくまでに五、六年をも要してしまつたのである。活字が長い間「お上」のものであつたから、無意識のうちに疑うことなく信じてしまふのである。

実際、モンゴル人は新聞が好きだ。日本人よりもよく新聞を読む。

「公権力」としての新聞の実例として、私事で恐縮だが、私の経験を書き添えておこう。私の家内はモンゴル人である。数年前、ウランバートル市の公的新聞である「ウランバートル」に、家内が日本人と結婚したことを批判する記事が掲載された。私は無視を決め込んだのだが、家内の「抗議してほしい。私の名誉が失われる」との言葉に、「ウランバートル」の編集長を訪ねた。最初、編

集長は「新聞記事に抗議しに来る市民はない」と拒否反応を示したが、プライベートに関わることが公の新聞に一方的に掲載されることの是非についての私の説明に納得し、記事を書いた記者から後日、謝罪があつた。モンゴルの市民にとって、活字が絶対であることが、編集長の最初の言葉からお分かりいただけるだろう。怖い

はこれを当然のこととジャーナリストが考えていたことである。

民主化運動から五年が経過すると、定期的に発行される新聞が極端に減つてしまつた。先に触れた新聞用紙の高騰が原因である。政府系の新聞こそ、国の予算で外国から用紙を輸入できるからいいものの、民間新聞は自分で用紙を調達して印刷所に持ち込まなければならぬから、**「志」**だけでは自由出版は成立しなくなつてしまつたのである。党の機関紙を除いて、定期的に発行されている一般の新聞は、政府系の「アルディン・エルフ」「ザスギン・ガザリイン・メデー」「ウランバートル」、民間の「モンゴルタイムス」「イル・トブチョー」「ホッホ・トルボー」等、一〇紙に満たなくなつた。あとは用紙が手に入った時、気まぐれに発行される。

新聞用紙の入手難を逆手にとつて、政府はマスコミのコントロールを開始していた。社会主義の放棄と市場経済化が進むなかで、政権は社会主義時代と変わることをモンゴル人民革命党が握つてきた。そして国政選挙があるたびに、国内から突然、新聞用紙が消え、人民革命党の機関紙「ウネン」と政府系新聞の独壇場となつた。

テレビ、ラジオも国営テレビのみであった。つまりモンゴルのジャーナリズムに人権に対する概念がなかなか育たなかったのは、こうした人民革命党政権の姿勢にあったことは明白だ。

●ジャーナリズムの本質を求めて

一九九五年の後半から、新聞用紙が大量に出回るようになり、いわゆるエロ新聞が街頭売りの主役を演じるようになった。それまでも「ハローン・ホンジル（暖かい布団）」が国内の新聞で最大の発行部数を誇っていたのだが、一九九六年六月の総選挙前後には、通りは過激な男女のヘアヌードを掲載した新聞であふれるようになった



通りで新聞が売られている。モンゴル人は活字を読むのが好きだ。

ていた。何かが商売になると見るや、猫も杓子も群がるモンゴル人の気質をよく表している。もちろんこれは見方によっては、モンゴルの市場経済が活発化してきたと取ることも可能だ。ちなみに一九九六年八月に私がウランバートル市内のある街角でまとめ買いした約四〇紙のうち、実に八〇%がエロ新聞か、過激なヌードが掲載されている「一般紙」であった。

一方、時のジャスライ人民革命党政権は、総選挙に勝つために、選挙に関する論評やインタビュー記事等は政党の機関紙と政府系の新聞しか掲載できないという法案を通してしまった。特に「アルディン・エルフ」紙は、毎日発行の本紙のほか、日曜版、文学新聞、婦人新聞、芸能新聞、英字新聞等、一党独裁当時に戻ったと錯覚させるほどで、新聞界を独占しはじめていた。

旧態依然とした人民革命党の独裁に危機感を抱いた国民は、真の民主化を選択した。民族民主党と社会民主党を中心とした民主勢力「民主連合」が国民の負託を受けることとなったのである。と同時に、モンゴルにおけるマスメディアのあり方も大きな転換期を迎えつつある。

エンフサイハン政権がスタートして、四カ月後の一九

九六年一月、まず街頭からエロ新聞の類が消えた。

「言論・出版の自由」といった建前論による抵抗もあったが、新聞の八〇%以上がエロ新聞というのでは紙資源のないモンゴルでは成立しない。課題はないわけでないが、政府の指導により、とりあえずは業界は納得した形だ。エンフサイハン新政権は近く、政府系の国内最大紙「アルディン・エルフ」の民営化を断行する予定だ。マスメディアを政権維持の具としないためである。

新聞を中心に、モンゴルのマスメディアは、ここ二〜三年以内に再編され、ようやく安定期に向かうものと予測される。現在発行されている新聞は、先に挙げたもの以外に安定しているものとして、「ウヌードル」「ビジネスタイムス」「トリ」等を付け加えておこう。週刊の英字新聞も二紙発行されている。一九九一年創刊の「モンゴル・メッセンジャー」と九六年創刊の「UB（ウランバートル）ポスト」である。通信社は国营「モンツァメ」のみで、「モンゴル・メッセンジャー」の発行元でもある。モンゴル国内の新聞、テレビ、ラジオに海外と国内のニュースを配信している「モンツァメ」も近く、半官半民に移行する予定である。

こと新聞に関していえば、収入の八〇%以上を購読料に依存している現状が、モンゴルの新聞経営をきわめて不安定なものとしている。広告が一本もない新聞も珍しくないのだ。モンゴルはまだロコミの世界なのである。

広告を出せる企業が育っていないこともある。だいたい広告産業が生まれてまだ二〜三年、というのが実態なのだ。定期的に発行している一般紙は一〇紙程度と書いたが、現状のモンゴルを見ると、採算ベースで新聞を発行できる新聞社は、政府系も含めて一社もないといっても過言ではない。政府の二紙も莫大な赤字を背負っており、広告以外の面でも社会主義的体質を改善しない限り、マスコミの真の自立・独立はおぼつかないだろう。九六年暮れに「アルディン・エルフ」の社内の掲示板に社告が出され、「勤務中に飲酒した者は解雇する」とし、その第一号として女性記者の名が添えられてあった。

新聞社でも勤務時間は夕方六時までが常識だし、日曜日にはドアは閉ざされたまま。そんな中でレイアウトを工夫し、海外ニュースを載せ、確実にインテリ層や学生に読まれている「モンゴルタイムス」(「アルドラル」が前身)や、古典的なスタイルながらも、反骨のエルデネ

バートル記者（「アルドチラル」の元メンバー）が一人で発行している「ホッホ・トルボー（蒙古斑）」が健闘している。この二紙は広告に依存していないだけに、見方を変えればジャーナリズムの本質を見据えているともいえる。広告に依存せずには「ジャーナリズム」が成り立たないプロセスを、モンゴルが教えてくれているからだ。

権力の「武器」としてのジャーナリズムも、モンゴルの国民はつい最近まで身をもって体験してきたばかりだ。「アルディン・エルフ」紙が言論による新たな支配もくろんだのは七〇年間の人民革命党独裁の甘い汁が忘れられなかったからにはかならない。モンゴル初の非共産党政権、エンフサイハン政権がその「アルディン・エルフ」の民営化を視野に入れているのは、モンゴルの健全化の第一号として評価していいだろう。

「ホッホ・トルボー」は、月に三回のペースで発行を続ける骨のある新聞である。絶えず権力の腐敗と闘っている姿勢は脱帽ものだ。記者はかつての「アルドチラル」のメンバーで、「民主派」のジャーナリストである。ジャスライ前政権の批判を続けたジャーナリストの一人だったが、現在は「民主連合」のエンフサイハン新政権と

も距離を置き、政権のチェックにはぬかりない。エルデネバートルは、優れて社会派のジャーナリストとしての立場を維持するために、広告を取らない姿勢を守り続けているのだ。これは言論・出版の自由の真の意味を理解しているからに他ならない。

エルデネバートル記者は、一九九三年に私のインタビューに答えて、次のような発言をしている。

「私は『モンゴルは屋根のない刑務所のようなものだ』と発言して、強い批判を受けました。われわれモンゴル人の中に、「人権」とは何かを知っている者などいないのです。それを知るための大前提が、民主化で得たこの「自由」なんです。「民主化後の社会的、経済的混乱のなか、確かに苦しい生活を強いられている人びともいる。だがもう一方で、自由の身となって、本来のモンゴルを、昔のモンゴルを取り戻している人びともいる。今日と明日だけの食べ物、つまり腹の空き加減だけで将来を考えている人びともいるが、私の意見は今日の食べ物よりも、モンゴルの将来のことの方が大切だ。この自由を食べ物と交換したくない」

アルター 学問を捨てたわ。ブタをひきずつたのよ、生きるために

小長谷有紀

●研究者生活への疑問

彼女の名前はアルター。一九五八年九月二日生まれ。

ちょうど三八歳の誕生日を友人たちと祝ったばかりである。電気炊飯器、電子レンジ、コードレス電話など、一般家庭ではめずらしいような電気製品にあふれたダイニングキッチンで、彼女はその転身を語りはじめた。

「アルタン(金)」という名前をつけてくれたのは、父方の祖母である。父はオブス県の出身であり、母はウランバートル市の出身であった。両親は町(ウランバートル)で知り合い、町で暮らしていた。だから、彼女が生まれたのはウランバートルであり、彼女を育てたのは祖母である。三人きょうだいの一番上。

彼女は、一九六六年、八歳で第二三学校に入学した。エリート学校として有名なロシア語学校である。

「試験を受けたといっても、まったくロシア語は知らずに入ったのよ。わからないなりに、すべての教科をモス

クワからやってきたロシア人教師から、ロシア語で学んだの」

一〇年生の卒業時の成績はもちろん優秀。国家試験を受けて留学先が決まる。彼女は生物学を希望し、ウクライナ共和国、黒海の北岸にあるオデッサ大学に配属された。専門は生物化学。

「なんといっても学生だもの、そりゃあ楽しかったわ。ブレジネフ時代は、ソ連の黄金時代だものね」

ソ連での五年間の学生生活は、まったく快適そのものであったという。一九八一年、優秀な成績で卒業したがゆえに、帰国後はウランバートルで医科大学の講師を務めることになった。大学に五年間勤務したのち、モスクワへの留学が決まる。彼女は、何の疑いもなくただひたすら研究者としての道を歩んでいたのである。

一九八九年に、大脳生理学の研究によって博士号を取得。研究はとても楽しかったという。帰国して、もとの

大学に戻り、今度は生物化学科の学科主任を務めることになった。ちょうど民主化前夜のころである。

当時の月給は二二〇〇トゥグルグだった。研究者の俸給は、決して多い方ではない。否むしろ、少ないといわなければならぬ。ちなみに彼女の夫は、ロシア人技術者のための専門病院で医師をしていたので、特別に高給取りであった。

「彼の給料はねえ、七万五〇〇〇トゥグルグよ。わかる？ だいたい五〇〇ドルぐらいなものよねえ」

彼女は計算機を取り出し、割算をしてその結果をみせながら言った。

「三四倍よ。私の給料のなんと三四倍なんだから」

ひたすら勉強し、研究に従事してきた彼女が、その道に疑いを抱きはじめてとしても不思議ではなからう。

●担ぎ屋の仕事

一九九二年、研究をつづけるために再びモスクワへの留学が決まる。しかし、当時のウランバートルは深刻なモノ不足にみまわれていた。モスクワとて楽ではなかった。

「モンゴル製のものといえば、わずかに



アルター。

塩と乾麺があったかなあ。いや、塩ももうなかったかなあ。モスクワでは三万ルーブルの奨学金をもらうんだけど、でもそれって一〇〇ドルにもならないのよ」

そして、彼女は担ぎ屋に転身する。「学問を捨てたわ。ブタをひきずったのよ、生きるために」

ブタとは、はちきれんばかりに膨らんだ袋やカバンなどの大きな荷物をさす。たいてい、中国で買いつけてきたさまざまな商品が詰め込まれている。衣料品や食料品、そして魔法瓶をはじめとする、ありとあらゆる雑貨を総じてブタといい、担ぎ屋の仕事は「ブタをひきずる」というのである。

「あの頃はねえ、モンゴル人はみんな、ブタをひきずっていたわよね。私はガンザガはやらなくてすんだけれど」

ガンザガとはもともと鞍ひものことである。鞍の四隅にぶらさがった革ひもには、狩りの獲物などを吊るすものであった。現代では、列車に乗り、商品を荷物として持ち込む担ぎ屋のことを指している。彼女の場合は、もっぱら飛行機で北京とモスクワの間を往復したという。

「夫の収入が多かったでしょ。だから、私たちは最初からかなり元手のある方として始めることができたのよ」
夫婦二人三脚で商売に転身したようである。中国で軽い衣料品を買って、それをウランバートルやモスクワでさばく。

「中国の商品は品質が粗悪だけど、とにかく現金商売だからね、契約書をと리카わすわけでもなし、そんなにトラブルというほどのことはなかった。大変なのは、ロシアの税関よ。それから警官。マフィアの強盗」

税関や警官の、法的根拠に則らない勝手気ままな金品の徴収は、それ自体、略奪に等しい。

「私個人としては、ロシア人は好きなの。なんといつても学校以来ずっと先生といえみんなロシア人だったんだもの。ロシア語で学び、ロシアで学んだんだものね。でも、税関官吏……あれは人間じゃない。人でなしよ」

ガンザガをしているモンゴル人が、たいていロシア語も不自由なままに、税関でいたぶられているのを見ると、思わずかわいそうになって助けてしまおうという。

ロシアに懲りた彼女たち夫妻は、さらに西方をめざす。ドイツやブルガリア、チェコスロバキアなどと取引をするようになった。彼女は雑貨をあつかい、夫はもっぱら車をあつかった。中古車を購入し、自ら運転してモンゴ

ルまで帰るといふ仕事をしていたらしい。その夫が九二年、ドイツで交通事故で死んだ。

「彼は車のなかに一人きりだったから、どんなふうに残ったんだか……」

●新しい生活

二年後の一九九四年、彼女はビジネスで知り合った男性と再婚した。突然やってきた不幸をものはねかえして、彼女はまったく新しい人生を切り開いている。

「私たち二人のあいだでは、どっちが社長ということもない。まったく対等な共同経営よ」

この夫妻を中心に、四人の間で一緒に貿易業を営んでいる。もっぱらブルガリアの煙草と食料品をあつかう契約書にサインをするために一年に一度ブルガリアを訪れるだけですむという。銀行口座に送金し、コンテナが到着するだけ。まったく信用できる商売相手であるらしい。列車でウランバートル駅に荷が到着すると、これを小売商にさばく。小売商はいずれもモンゴル人たちである。その数およそ一〇〇人。品物を渡して現金を受け取る。みな信頼のおける人たちで、彼らがどのような価格で小売しているかは関知しない。

彼女にはどうやら商才があるようだ。一九九六年の夏には、オペル4WDの新車を購入した。ウランバートル

市の西郊の第四ホローとよばれる地区に、二階建ての自宅を新築している。九五年にはできてははずだったが、建設会社が大幅に予定を遅らせているという。会社の方も正式に設立する段取りがととのつた。着々とビジネスを大きくしている彼女に迷いはみじんも見受けられない。ただ、せっかくの研究歴を活用したいとは思っている。

「これからは、石油、建築、鉱産資源などもあつかっていきたいと思っているの。それから、将来的にはね、これまでずっと生物化学に関する研究をしてきたんだから、それを活かしたビジネスがしたいとも思うよね。でもまだ時期尚早でしょう。モンゴルの市場は小さいし、インフラが整備されていないから外国の投資もまだまだだし……。日本にも行ってみたいとは思うけど。仕事ぬきでただ旅行だけしようとは思っていないのよ」

そんなふうにビジネスの夢を語る彼女。小さい頃から成績優秀で、何も迷わずに勉強を続けてきた彼女のような女性が多い。草原に生まれ育った人も、ウランバートルの都会に生まれ育った人も、みなよく学んだ。しかし、資本主義経済への転換期をむかえて、大勢の人びとがこうして過去を捨てて、まったく新しいことを学ぼうとしている。

●ナラーの離婚

彼女の共同経営者であるナラーもまたそんな女性の一人である。本名はナランツェツェク。太陽の花という意味であり、いわば「ひまわり」さんである。彼女の住むアパートの一室に、続々と段ボール箱が運び込まれてきた。中身はどれも札束。きれいに整理されたトゥグダ札の束が入っていて、経理を担当する女性がひたすら枚数を数えている。明日、銀行に入金してドルに交換するという。応接室には段ボール箱が陣取っているので、彼女はダイニングキッチンで自分の転身を語りはじめた。

彼女は一九五九年七月一日生まれ。アルターより一つ年下である。両親ともにアルハンガイ県の出身だったが、彼女はウランバートルで生まれた。八歳で入学し、一〇年生を卒業したあと、ソ連のバクー大学へ入学した。彼女もまた成績優秀であったからこそ、ソ連へ留学したわけである。

「専門は生物化学よ」

彼女は吐き捨てるように言い、大声で笑った。笑い飛ばす以外にどうしようもないほど、彼女は過去と断絶した生活を生きている。

一九八四年に大学を卒業し、ウランバートル市の医学中学で生物学の教師となった。九一年に、その学校は医学研究所となり、彼女は伝染病研究部門の研究者となる。

月給は一万五〇〇〇トウグルグだったという。

「どうして私がブタをするようになったか教えたげよっか。その理由というのはね、離婚して、一人で食べていけなくなつたからよ」

彼女によれば、一五年つれそつた夫と別れ、それからブタの商売をするようになったらしい。一九九三年のことである。

社会主義という体制が崩壊したとき、夫婦という体制を維持できなくなったカップルは多い。離婚率の推移を統計上正確に把握することはできないけれども、民主化運動に積極的に取り組んで亭主を見かぎつた女性や、資本経済を体現しようとして夫と折り合いがつかなくなつた女性は、確かに存在する。彼女もまたどうやら後者に属するように思われる。

●ブタ商売から貿易へ

「まずウランパートルのチェンジ・バザールでトウグルグを中国元に交換するでしょ。そうして北京へ行って買うの、だいたい中国製のジャケット類を。四季折々のをね。それを抱えて国際列車に乗り込み、モスクワへ向かう。道中、停車するごとに、商品を売るわけ。停車時間



ナランツェツェク。

はそうねえ、一〇分か一五分くらい。このわずかな間に売りまくらなくっちゃね。およそ三〇くらいの駅がある。そこで売れなければ商品は焼いたも同然」

「焼く」という表現は、大切なブタをみすみす失うことを意味する現代の流行語の一つである。

平均して一カ月に一度、一年に一二回、北京とモスクワの間を往復したという。

当時は多くの人びとが同じような商売をしていたので、まず切符を入手することが一番の難関であつたらしい。

「道中に得たルーブルがあるでしょ、これをモスクワでドルに換えて、チョコレートやガムや皿なんかを、買えるものはもう何でも買って帰るの」

しかし、このブタ商売の危険は大きい。ロシアの駅では、子どもや若者に商品をひったくられた。彼らはいがいがいロシア・マフィアの手先であり、組織的に行動している。

「走って逃げてゆく彼らに追いつくことはできないでしょう。私たちは駅から出るわけにはいかないんだから」

最も恐ろしいのは、ロシアでの関税徴収である。携えている商品の量を見て、自在に税金を徴収するという。

「二〇〇〇〜三〇〇〇ドル取られるのは普通。一〇〇〇ドル以下であることはまずない。衣料だとか雑貨類だとかなのよ、こんなものを全部売りさばいたとしても、そんなに儲けがあるわけなし……」

これでは丸損である。列車にたくさんの荷を抱えて乗ることが許可されなくなったのをきっかけに、一九九五年、彼女はブタ商売に見切りをつけた。

今ではコンテナ輸送の貿易を専門にしている。アルタ姉さんの配下で仕事をしている。

「もうそりゃ断然、身体が楽になったわよ。契約更新のとき、一年に一度、飛べばいいだけなんだから。小売の人たちとはね、ブタ時代のときからの知り合いだから、信頼がおける。問題なくやってるわ」

一九九二年の選挙では人民革命党が勢力を得て、資本主義化にブレーキがかかったといわれる。確かに、所得税は六〇%とされ、これでは商売も思うように展開できなかつたといわざるをえない。九六年六月の選挙では民主化勢力が勝ち、新政府は今後、所得税を二〇〜三〇%に下げるといふもつばらの噂である。彼女は期待する。

「これからよね、私たちのビジネスも」

資本主義の扉を自力で開こうとしたとき、アルターは事故で夫を失った。一人息子は彼女のもとにとどまり、新しい同志を得て三人で暮らしている。息子には、週に二〜三回アメリカ人の教師による英語を学ぶことができるようにと私立の国際学校へ行かせているという。

一方、ナラーの方は離婚して、一人娘は夫が引き取った。もともと小さい頃から夫の母が育ててきたから、娘が父方で暮らすことを自分で選んだという。いまのところ単身の自由を謳歌している。

すべての点でまったく同じではないが、二人とも研究・教育職をなげうってビジネスに転身した。社会主義から資本主義へのこの国の模索を、まさに生身のそのからだで実現している。



●物流

食品流通の光と影

内田敦之

●モノ不足からモノがあふれる時代へ

社会主義体制の崩壊、民主化、市場経済への移行とともに旧体制の流通システムが崩壊し、モノ不足が続いた。モノ不足は一九九二年にピークとなり、日本のメディアでもこのことが、さまざまな形で紹介された。この年の秋、私はウランバートルをはじめ訪れたが、肉、小麦、食用油、砂糖、アルヒ（モンゴル・ウォッカ）など主要な食料品が配給制になっており、国営デパートやあちこちの商店の陳列棚には空きが目立ち、行列も目についた。市場経済移行期のモンゴル国にとって、この頃は経済的にもっとも苦しい時期であったが、他の発展途上国で報じられているような飢餓については、あまり伝えられなかった。広大な国土に人口二三〇万、この大きな小国では、極限の状態で、都市と地方の間で伝統的な互助システムがうまく機能したのである。うがった見方をす

れば、飢餓の苦しみを経験していないから、それに安住し、発展への推進力が鈍っているのかもしれない。

この状況の中から、現在ではザハとよばれる市場がたくさんでき、さまざまな食料品があふれるまでになった。ザハは体育館か倉庫のようなスペース、あるいは屋外に陳列台を並べその上に商品をおいただけの市場である。私は一九九四〜九六年にウランバートルで生活したが、食料品は目に見えるほど日ごと豊かになっていった。日本人観光客をザハに連れていくと、よほど覚悟してからモンゴルに来ていいのか、たいていの人は「なんだ、モノがあるじゃないですか」と驚く。お金さえ出せばいろいろなモノが買えるようになっていた。ただ、最悪の時期に比べれば落ち着きをとれどしつつかあるが、一九九七年に入ってもインフレは依然激しく、公務員や一般のサラリーマンの暮らしは苦しい。

ある食料品ザハに並ぶ食料品を表にあげてみた。ただし、夏期以外の季節には野菜、果物の種類が大幅に減り、いろいろを欠くことをつけ加えておきたい。

●流通を担う人びと

短期間にこんなにモノが豊かになったのは、担ぎ屋とよばれる人びとが、物資を運びこんでいるからである。



ザハの中。

この担ぎ屋をモンゴル語で「ガンザガン・ナイマーチン（鞍に付いた革ひもの商売人）」という。「ガンザガ」は本来、狩りに出かけた際、獲物をくくりつける鞍の革ひものことである。マーケットに並んでいる食料品の産地を見ると、世界を飛び回る彼らの活躍ぶりがわかる。かつてユーラシア大陸を舞台に、縦横に活躍した時代を彷彿とさせるのではないか。

モンゴル国は、ユーラシアの内陸にあって「陸の孤島」などと言われることもあるが、逆に言えばアジア・ヨーロッパ諸国と陸続きである。さらに近年、ウランバートルは、モスクワ、北京、フフホト（内蒙古）、アルマータ（カザフスタン）、大阪、ソウル、ベルリンなどの都市と直行便で結ばれ、空からもどんどん物資が入ってきている。

ビールの例をあげてみよう。ウランバートルでは、いながらにして世界のビールが味わえる。ドイツのレーブンプロイ、ベックス、チェコのピルスナーウルケル、オランダのハイネケン、デンマークのカールスバーグ、シンガポールのタイガー、中国の北京、五星、韓国のクラウン、アメリカ合衆国のエール……、数え上げればきり

がない。この頃は日本のキリンやサッポロもときおり飲めるようになった。

モンゴル国にもトンガラグ（澄んだ）、ニースレル（首都）などの国産びんビール、はかり売りの生ビールがあるが、残念ながら、生産量が少ないためかあまり見かけることはない。これらのビールが日本の半分以下の値段で飲めるので、ビール通にはたまらない。ただし、世界的に有名なブランドのビールでも、製造年月などよく見て買わないと、長距離を運ぶ途中で品質が劣化しているものがある。

●モノの流れの問題点

ガンザガン・ナイマーチンらの活躍で、モノは豊かになっていく。外面だけ見れば「ダイナミックに躍動するモンゴル国」という印象を与えるが、その一方で国民の毎日の生活に影を落とす暗部もある。

社会主義時代、あらゆる面でブレーキの役割をはたしていた体制の圧力がなくなり、モラルが低下し、弊害が出てきている。多くの個人商人があらわれ、商品を右から左へ転がして利益を得るようになったが、彼らがするのはほとんど一過性の商売で、責任のある仕事をしない。

拝金主義がはびこり、金のためなら何でもやるという者さえいる。

その最大の問題の一つが、内容を問わずどんなものでも輸入して売ってしまうということだ。そのため品質の粗悪な食料品が大量に入ってきており、食中毒などが新聞・テレビで頻繁に報道されるようになった。とくに夏期には保存上の問題も加わって、被害が多数発生している。いくらモンゴルが涼しいといっても、暑い日にはウランバートルで三〇度を超える。冷蔵設備がととのっていない、あるいは管理がずさんなど、保存状態が悪いとすぐに腐らせてしまう。

一九九五年一〇月には、著名な医師が、外国人がよく宿泊するホテルのレストランで食事をして死亡した。原因はポテトサラダに使われた生卵による食中毒ということである。

この事故のあと、日刊紙「アルディン・エルフ」に「モンゴル人が生き残れる保証はまったくない」という見出しの記事が掲載された。ある記事によると、このホテルのレストランは、その前月に冷蔵庫が故障し、調理人の衛生面にも問題があるということ、五万トゥグル

グ(約一万円)の罰金を課されて注意を受けたばかりだった。このように人命にかかわるような違反でも、その罰金の上限は二〇万トウグルグにすぎない。

「わが国に食料品の安全の保証はあるのか」との問いに対して、当時の厚生大臣が「保証は政府や大臣や省庁が出せるものではなく、消費者自らが生存を保証すべきである。保証付の食料品を買い、食べる習慣を身につけることが重要である」と答えたという。

また別の記事では、ある会社がドイツから輸入したNATO軍の携帯食は、検査の結果 aflatoxin B1 という物質が基準値以上検出され、人体に有毒ということであった。このことが報道されたとき、私はすでにこの携帯食を食べてしまったあとだった。ハンバーグやパスタはけっこううまかった。

また、ネコの模様の包み紙の中国製キャンディは、実はキヤットフードだった。モンゴル消費者権利保護協会は、上記二商品を販売禁止にするという警告を出したが、あちこちの店で売られ続けていた。

さらに、記事は続く。食品関係の企業・工場の従業員
の七七・三％は専門知識がない、食堂の六〇・四％は衛

生面で問題があり、三八・七％は水道が通っていない、三四％は食品運搬用の冷蔵車がない、五〇・一％は冷蔵庫がない……という警告を国立衛生・伝染病・微生物研究センターが出した。この広大な国の四〇カ所以上の国境の管理事務所のうち、衛生検査官は六カ所にしかないという。また、国境が開かれる短期間に大量の食料品が入ってくるため、現在の態勢と設備では十分な検査ができないのが現実である。このように、食料品に関するさまざまな問題が論じられた。

これを好機として、食中毒問題を何とか解決しようという気運がもろあがり、具体的な対策がとられるのかと思っていたが、同年一月、ふたたび医師らが食中毒にかかった。続いてウランバートル・カーペット工場社長が食中毒で死亡した。いまだに食中毒問題は、根本的な解決ができないでいる。

●対策と援助

メディアがあればほど騒いだなかで、いったいどんな対策が講じられたのだろうか。輸入食料品の安全検査は国立規格化・度量衡研究所が管轄することになっているが、同研究所の検査態勢も、自由化後、物資の大量流入に対

応できず、また検査機器も老朽化がはげしいため適正な検査ができない状態である。

検査機器の刷新を日本政府援助で実施したいと要請を出していたが、最新機器を導入しても有効利用できるかどうか問題となり、実施されないまま数年が経過した。最新技術習得のための専門家派遣の要請も並行して出していたが、こちらも優先順位が低く、実施のめどはたっていないようである。そのうち韓国の援助により検査機器が導入された。検査態勢が十分に整備されれば、問題の一部解決につながるにちがいない。

それにしても常に最新の機器が供与される援助のあり方は改善の余地があるのではないか。その国の発展レベル、条件に合った機器が供与できれば、もっと有効に活用され、その国の発展にいつそう寄与できるのではないだろうか。

モンゴル国でも他の開発途上国と同様に、援助される側よりむしろ援助する側の主導で援助がなされているのではという疑問がわく。火急の問題で、国民の生活に密着し、社会問題化しているにもかかわらず、要請が出されてから数年間も実施が見送られてきてしまったことは

残念なことだ。

食料品の危険性を訴え、食料品の安全性検査ができるような態勢づくりのプロジェクト実施に向けて、あらゆる努力をしていた国立規格化・度量衡研究所職員しんしんの真摯な取り組みが忘れられない。

食の安全性は、いうまでもなく国家・民族の安全保障にかかわる問題である。一九九一年以降、穀物の生産高は年々二〇%ほど減少しており、一九九三年以降はジャガイモ等、野菜の生産も大きく減少している。このように民主化後おとろえてしまった農業を、何とか再生して、より安全な国産の食料品の供給を安定させる方向に、関係各機関が引っ張っていく必要に迫られている。農業を再生・発展させることで、食糧問題を解決するばかりでなく、農耕文明のすぐれた点、たとえば勤勉などを学び、モンゴルの文化に取り入れることができれば大いにプラスになると、ある年輩のモンゴル人が語ってくれた。

隣の中国には、安価で品質の悪いモノから高価で品質のよいモノまであらゆるモノがある。目前の利益に走って、粗悪品を買って運んで売っているのは、ほかでもないモンゴル人自身である。自分たちの安全は自分たちで

守っていく、受け入れ側である自分たちの態勢をととのえていく、そんな強い意志をもたなければ、この国をどうやって守っていくというのだろうか。

輸入商品を含めた食料品の安全性については、食糧・農牧業省、厚生省、前出の規格化・度量衡研究所、さらに国立衛生・伝染病・微生物研究所、食品業者連盟、消費者権利保護協会などの関係機関・団体が横のつながり（これがモンゴルではなかなかむずかしいようだが）を密にして

当たらなければ、決して解決できない。

日本をはじめ世界各国が、この分野で得てきた経験を十分に活かすことができれば、さらに効率的であろう。またこの問題を考えるとき、新聞さえも何日も遅れて届き、情報が限られてしまうため、地方では都市で販売禁止にされたモノが売られてしまう。伝統的な遊牧を守り、この国を支えている地方の牧民の劣悪な生活条件を改善する具体的な方策を、ぜひとも考慮しなければならない。

●肉類

ヒツジ=750~850
牛骨なし=1000~1100
ソーセージ=1900
鶏(ハンガリー)(1羽)=2700

●穀類

コムギ1級=270
コムギ上級(中国)=250
大型丸パン=150
米(ロシア)=350~360
ソバ(ロシア)=800
クリ(ロシア)=38
干うどん(250グラム)=110
ひやむぎ(日本)(500グラム)=400

●乳製品

アイラグ(馬乳酒)=300
バター(ロシア)=2500
牛乳(計り売り)(1リッター)=140
アーロール(乾燥チーズ)(1箱)=700
ズーヒー(サワークリーム)=400
チーズ(オランダ)=3700

●野菜

キュウリ=300~400
ジャガイモ=150
タマネギ=300
キャベツ=500
ニンジン=500~600
ニンニク(1個)=50
ネギ(1束)=80
ニラ(1束)=100
ピクルス(ポーランド)=850

●果物

リンゴ(中国)=500
スイカ(中国)=600(1つ3.6キロ)
パイナップル(中国)=600
モモ=2800
まくわ瓜(中国)=2000
干ブドウ(ロシア)=1000
バナナ(フィリピン)=1800

●お菓子

エクレア(1個)=130
ウエハース(ロシア)=50
ピーナッツ菓子(ベトナム)=150

●その他の食料品

砂糖(韓国)=460
ミネラルウォーター「ボン・アクア」(1.5リットル)(香港?)=950
食用油(チェコ)(1リッター)=1150
ハンバーガー(屋台)(1個)=240
ピッツァ(屋台)(1枚)=480
サマル(松の実)(1カップ)=100
ロールケーキ(1本)=650
卵(1個)=55

主要食料品とその価格。ダブルブーン・オール食料品ザハにて1996年7月中旬調べ。国名のない食料品はモンゴル製。価格の単位は現地通貨トゥグルグ、1円=約5トゥグルグ。

失業問題

コラム

前川 愛

失業が、問題になってきている。一九九四年では、生産年齢人口八六万人に対し、失業者数は約七・五万人に達し、失業率八・七%と高い。

アイマダ別で見ると、生産年齢人口一万人に対しての失業率は、ウランバートルから遠隔地に行くほど増えてくる(表1)。ウランバートルは総人口の四分の一が暮らす大都市である。当然雇用のチャンスも多く、人びとが流入してくる。

そのウランバートルは、確かに失業率では低い、絶対数では一番多く、公式統計だけ見ても失業者が約一二万人いる。そのような人びとが事業を始める資本を十分に用意でき

るはずもなく、多少リスクが大きくても一攫千金いっかく的なビジネスをねらう。担ぎ屋が流行するのもし少ない元手で始められるからだろう。

モンゴルの産業別就業人口(表2)を見ると、農牧業の比率が高い。ウランバートル、ダルハン、エルデネトを除くと、地方では工業が主要産業となっていない。輸送機関がまだ整っていないところが大部分なので、たとえ天然資源が豊富な地域でも、すぐには雇用に結びつかないのである。

一九九六年七月の統計では、失業者は五・一万人に減り、雇用状態は好転している。興味深いのは、失業

者にしめる女性の割合が五六―五三%を推移し、ほとんど変化していない点である。社会主義の遺産かもしれないが、雇用状況が悪くなると女性の失業者が増える国とは異なる傾向を示している。

ウランバートル※	244(人)	ウブスハンガイ	460(人)
中央	280	スフバートル	504
ドルノゴビ	305	ヘンティ	525
オブス	327	セレンゲ	538
フブスグル	368	ボルガン	629
ウムヌゴビ	369	ゴビアルタイ	632
ドンドゴビ	390	バヤンウルギー	664
アルハンガイ	430	ザブハン	749
ホブト	438	ドルノド	1,568
バヤンホンゴル	456		

表1 アイマク別生産年齢人口1万人あたりの失業者数(1996年)

(注) ※印はアイマクではなく地域

『モンゴル経済・社会状況解説』モンゴル統計局、1996より

	1960	1970	1980	1990	1994
工業	50.4	60.6	85.4	131.6	100.9
全体に対する割合	12.1%	14.1%	16.6%	16.8%	12.8%
農業	254.2	222.3	203.0	258.8	336.6
	60.8%	51.9%	39.3%	33.0%	42.8%
建設業	28.9	23.7	32.7	66.0	27.3
	6.9%	5.5%	6.3%	8.4%	3.5%
運輸・通信	15.4	24.1	37.4	57.7	31.5
	3.7%	5.6%	7.2%	7.4%	4.0%
商業	14.7	23.7	34.5	54.6	67.4
	3.5%	5.5%	6.7%	7.0%	8.6%
その他	54.4	74.3	123.0	214.9	222.8
	13.0%	17.3%	23.8%	27.4%	28.3%
計	418.0	428.7	516.0	783.6	786.5
	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
生産年齢人口	—	—	—	—	861.4
内有職者	—	—	—	—	786.5
内失業者	—	—	—	—	74.9

表2 産業別就業人口

(上段：千人) (下段：%)

State Statistical Office of Mongolia, *Mongolian Economy and Society in 1994, 1995*より

●人口

人間が少ない国の悩みと楽しみ

前川 愛

●人口増加

初めてモンゴルに着いた朝、道を尋ねるついでに、こ
う聞いたのを覚えてる。

「なぜ、今日は街に人が少ないのですか？」

ウランバートルの広々とした道路を歩いていると首都
とは思えないほど閑散としているという印象を受けたの
である。そう、モンゴルは世界で一番人口密度が低い国
である。一九九〇年で一平方キロメートル当たり一・四人、日本
の三三二人とは人間の詰まり具合から全然違うのである。
そんなモンゴルを人口という視点から見てもみよう。

革命後の一九二五年のモンゴルの人口は六八万四〇〇
〇人、一九九四年には約二三〇万人に増えている。社会
主義時代のモンゴル政府は人口増加政策を積極的にすす
めていた。政府が目指した、伝統的な遊牧業国から近代
的な農工業国への移行には、農業・工業分野での十分な

労働力の供給が必要不可欠だと考えられていたからであ
る。経済が比較的安定して成長していた五〇年代と六〇
年代、特に建設分野での労働力不足が現れ、モンゴルは
最初は中国、その後はソビエトから労働力の貸し出しを
受けている。手厚い母子保護政策がおこなわれ、各アイ
マクの県庁所在地にも医療設備が整えられ、避妊具の流
通・使用は極端に制限されていた。都市の家庭と牧民と
では少し差があるが一〇人兄弟は珍しくないという。

図1はアジア、日本などと比較した一九五〇年から二
〇二五年までの国連による人口増加率の過去の値と予測
値である。アジアのなかでも人口規模が国土に対し非常
に小さく、過去長年にわたって人口増加政策がとられて
きた影響もあり、モンゴルは二〇二五年まで少しずつ下
がりながらも高い増加率を保ち続けるように予測されて
いる。二〇二五年モンゴルの人口は三八〇万人になると

	男	女	合計(1,000)	人口密度/km ²
1918	330.3	317.8	648.1	0.4
1925	345.4	338.6	684.0	0.4
1940	363.0	380.8	743.8	0.5
1950	383.1	389.3	772.4	0.5
1960	483.6	484.5	968.1	0.6
1970	631.2	634.2	1,265.4	0.8
1980	842.7	839.3	1,682.0	1.1
1985	952.2	948.4	1,900.6	1.2
1986	976.7	973.0	1,949.7	1.2
1987	999.5	997.5	1,997.0	1.3
1988	1,020.7	1,023.3	2,044.0	1.3
1989	1,045.9	1,049.7	2,095.6	1.3
1990	1,072.3	1,077.0	2,149.3	1.4
1991	1,091.4	1,095.8	2,187.2	1.4
1992	1,105.3	1,109.7	2,215.0	1.4
1993	1,119.6	1,130.4	2,250.0	1.4
1994	1,135.4	1,144.6	2,280.0	1.5

表1 人口と人口密度

State Statistical Office of Mongolia, *Mongolian Economy and Society in 1994, 1995*より

されている。

一九八〇年代ははじめから出産可能な女性の人口は増えているのに出生率は下がりはじめ、現在も下がり続けている。民主化後も母親への援助などが打ち切られたわけではなく、人口増加政策に変わりはないが、八九年の終わりに人工中絶が合法化されている。合法化の後、自然流産の報告数が激減したとも伝えられ、八〇年代のこれだけの低下は合法化以前にも中絶がおこなわれていたことを暗示している。

最近では商店でコンドームが売られているのを目にするようにもなった。子どもの数を人工中絶によって調整するのは、とても理想的とは言えない。適切な家族計画は政府が目指す人口増加を脅かすものではないので、女性の健康のためにも避妊の知識や避妊具の流通は重要な課題だろう。

●人口の年齢構成

モンゴルではお年寄りと一緒に歩いている子どもをよく見かける。女性も男性と変わりなく働くことが当たり前という国だからでもあるだろう。

表2の通り、モンゴルでは〇―一四歳までが人口にし

める割合が非常に高く、六五歳以上が低い。日本と比べてみると（日本はまた、非常に老齡人口の割合が高い国ではあるが）、一九九〇年で〇・一四歳までは一八・二%、六五歳以上が一・二・一%なのでモンゴルとの人口の年齢構成の違いがはっきりわかる。このように若年層がしめる割合が大きいということは、今後も当分の間、人口が増えることを意味している。この子どもたちがすぐに子どもを持つ年齢に達するからである。たとえ出生率が急に低下し、現存の人口一人に対し、一人の出生というレベルに下がったとして、人口の増加が止まるまで約七五年かかると言われている。

これはモンゴルの現在と未来に難しい問題を与えるかもしれない。いくら政府が労働力の充実のために人口増加を奨励したとしても、かつての労働力不足から今は失業が問題になっているからである。失業率は一九九四年で八・七%にのぼり、経済が混乱し、社会は働くことができる人口につりあうだけの仕事を作り出せないでいる。

モンゴルは高校までは学費は無料である。しかし、ウランバートルなど都市部で親が長期間失業している場合、子どもは学校へ行かなくなる可能性は十分にある。日本

でも上映されたオランチメグ監督の「枷かせ」という映画のように、ストリート・チルドレンになる子どもも増えている。このような読み書きを習得していない子どもは、将来必ずといっていいほど、ホームレスか失業者になつてしまうのである。また、地球の赤道に近い国々とは異なり、モンゴルの冬の寒さはストリート・チルドレンやホームレスにとれば生死にかかわる問題である。

都市部だけでなく、農村部でも民主化による家畜の個人所有化などにもなつて学校へ行かなくなる子どもが増え、問題になつている（このような子どもたちのためにモンゴル人と一緒に移動学校の活動をしている日本人がいる）。モンゴルは発展途上国のなかでは抜群に識字率が高かつた。一九八九年の調査によると九〇%以上である。国土が広く、人々が稠密ちゆうみつに暮らしているわけではないモンゴルで、今後識字率の高さは情報の伝達や技術の伝播に欠かせない武器となるはずである。それが徐々に確実に下がつてきていることは本当にもつたないことだ。

●移動

移動といつても、遊牧のなかでの季節による宿営地の移動ではない。しかし、そもそも遊牧民である彼らの引

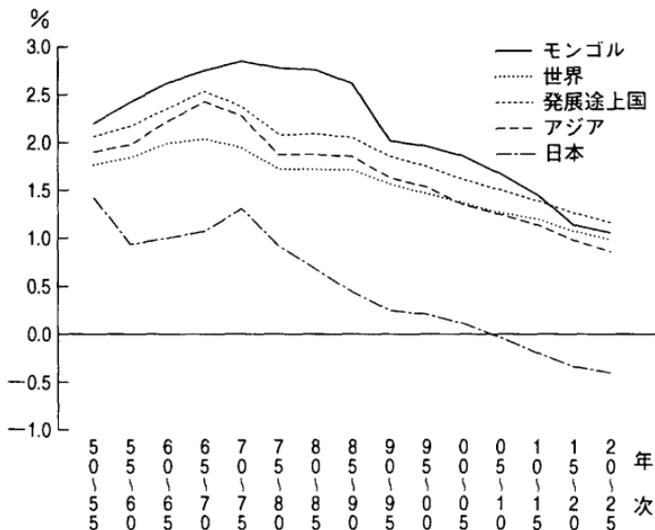


図1 年平均人口増加率

United Nations, *World Urbanization Prospects, The 1994 Revision*, 1995より

単位：%

	1969	1979	1989	1995
0~14歳	44.45	44.28	41.86	38.82
15~64	49.54	50.76	54.09	57.51
65~	6.01	4.96	4.04	3.67

表2 年齢別人口構成比

State Statistical Office of Mongolia, *Mongolian Economy and Society in 1994*, 1995より

つ越しの概念は、私たちと同じだろうか。例えば、移動の際、距離は通常大きく作用する。つまり移動先が遠ければ遠いほど同じ国の中でも文化圏が異なったり、言葉に差が出てくるので、移動者は新しい土地で暮らす「覚

悟」のような心理的負担が必要となる。また、距離に依りて移動に必要な経済的負担も大きくなる。だがモンゴルの場合は、一時間でゲルをたたんで引っ越し準備完了という伝統である。草原でも都市部でも住まいを移すことの受

けとめかたや意味は私たちとは違ふのかもしれない。モンゴルでは、残念ながらそれらを示すデータは得られていないが、次に人の移動というテーマでモンゴルを探ってみよう。

社会主義時代、国境を越えての移民としての人口移動は無視できるほど少なく、その他の出国は目的が限られたものであった。そのほとんどはソビエトや東ドイツへの留学生である。モンゴルがソビエトを兄弟国としていた時代、モンゴルのエリートたちは数多くソビエトに留学している。なかにはモスクワの演劇学校で学び、モスクワの劇場で照明係の仕事を一年間していたという人などさまざままだ。

民主化後も移民が増えているということはない。変わったのは人びととつての中国やロシアへ行く目的である。ロシアはすでにエリートたちが勉強へ行くところではなく、中国は担ぎ屋が物を仕入れに行くところとなっている。

モンゴル国内の人口移動はどうだろう。社会主義時代、牧民には定住化がすすめられていた。県の中での移動・定住は基本的に自由で、県の下のソムという行政機関

(郡のようなもの)からの許可を取ればよかった。県を越えて移動する人は牧民には少なく、一五二〇年前までは農業のために移動する農夫もいたが、今ではみられなくなっている。

現在ではウランバートルから遠いホブド、ゴビアルタイ、バヤンホンゴルなどの県から、ウランバートルという大きな市場を持つ中央県へ牧民が家族と家畜とともに移動し、肉や乳製品、毛を売りにきている。モンゴルは都市部以外の土地は国の所有で、牧民ならどこでも遊牧できるのでそのまま出身地県には帰らず、定住している牧民も増えているという。

これに対してウランバートルへの移動は、今でも学生や政府の仕事で来る人以外、ウランバートル市の許可が必要である。これは社会主義時代からウランバートルや県庁所在地は国によって計画的に作られ、人口規模なども管理されていたからである。地方で遊牧を生業とする人が多ければ、都市はモンゴルであまり発展することはないだろうから(当たり前のことだが都市に寄り集まって暮らしていたら牧畜はできない)、公共サービスや物の流通のために計画的に国が整備する必要があったのだ。

しかし現在、実際にはウランバートルへ来る人びとは、許可なしで入ってくる。そのウランバートルへの流入者はアパートに住むのは難しいため、たいていゲル・ブロックに住む。ゲル・ブロックとは人びとが草原でゲルに住むように、都市でゲルに住んでいる地域である。アパート群に混在してぼつぼつと市内に点在するのではなく、ある程度のゲルが集まって、ゲルばかりの区画を形成していることが多い。ウランバートルの中心部ではガンダン寺の周辺で見ることができ、今、ウランバートルにおけるゲルは北・西部で増え続け、約四万のゲルがウランバートルを取り囲んでいるという。ゲルに住む人びとは昼間は市内中心部へ働きに出かけ、夜になると戻ってくる。二〇年から二五年前までは市内の中心部に近いところにも多くのゲルがたっていて、特にザローチョーデ通りの北部にはたくさんゲルがあったらしい。それらのゲルはアパートなどの建設にともない、郊外へと出されていった。ゆえに市内中心部にあるゲル・ブロックほど古く、市内から遠いほど新しいものである。

●環境

広い国土にもかかわらず、二三〇万人の総人口のうち

約四分の一にあたる六〇万人が、ウランバートルに住んでいる。そして前述のようにゲルがともも多い。問題はゲルの多くは都市基盤が整っていない状態にあることである。例えばウランバートルには下水処理場があるが、アパートにつながっていても、ゲルにはほとんどつながっていないという。今、モンゴルには担ぎ屋たちによって外国から運ばれてきたさまざまな物が出まわっている。洗剤なども売られているのだが、それらが使われ、下水処理されないまま流された場合、最終的には草原にも流れていく。また、モンゴルの澄んだ空のイメージとは程遠く、ウランバートルでは大気汚染が深刻な問題となっている。モンゴルで乳幼児の死亡率が高いのは、大気汚染による気管支の病気が原因だとさえ言われている。近代的なアパートにはセントラル・ヒーティングが整っているが、四万のゲルでは木材や石炭が暖房の燃料として使われているからだ。

ウランバートルを離れて草原へ出てみても、さまざまな問題がある。今まではポイッと捨てても分解され、土に還るゴミばかりだったのが、そうはいかなくなっている。地方とウランバートルを結ぶ大きな道路沿いでは空

缶やペットボトルが転がっているのが目に入る。また、交通量が車の増加に従って増えているのに、主要な道路でさえ雨が降るとすぐにぬかるんでしまう。しかたなく車は道路から少しはずれた草原を走るのだが、一度車が通った草原は、新しい草が生えにくい。これは草原が少しずつではあるが荒れていく原因の一つになっている。

そのうえ、先に述べた政府の定住化政策で牧民が広範囲にわたり家畜を移動させなくなった結果、牧草地はやせてきたと思われる。そもそもモンゴルという土地で遊牧が発達したのは、定住して農耕するには適当でないという自然条件があったからであろう。より多い人間を養うためには、より多くの家畜が必要となるが、過放牧にも過剰人口に対しても脆弱な土地なのだ。もし、草原が荒れてしまい、牧畜では生活できなくなったら人びとは仕事を求めて都市へ流入するかもしれないのである。

人口という視点から現在のモンゴルが抱える厳しい状況ばかりを述べてしまったが、しかし最初に述べたように今でも人口密度一・五人というこの国は本当に美しいと思う。草原に行けば視界に建物も人間も一つも目に入らず、聞こえてくるのは風の音だけという世界がいくら

でも広がっている。これほどの「一人」を味わえるところは日本にはなかなかない。だがこれは人間のつながりが希薄になるということを全然意味しない。人が少ないからこそつながりが強くなるのだ。モンゴルの自然では一人で生きていくことは本当に難しい。冬の草原で次の家まで何キロあるかわからないのに、もしゲルの扉を開けなかったらその人は凍えて死んでしまうかもしれないのである。モンゴルの自然環境と人の少なさが、モンゴルのホスピタリティを育んできたのだ。

草原が減少するから車の使用をやめるなどというのは、現実的でない。人間の生活で車を輸送手段としてうまく使いながら自然環境と折り合いをつけていくのが重要なのだ。国や地域に対する適度な人口があるとしても、新しい農牧業の技術や外国との交易関係によってモンゴルのそれも変わっていくだろう。経済危機や社会システムの混乱が伝えられるが、遊牧というモンゴルの自然に高度に適応した伝統を生かしつつ、持続可能な発展をモンゴルが選択していくことを期待したい。

新生モンゴル国のはやり言葉

コラム

小長谷有紀

かつてモンゴルでは「資本主義を飛び越えて」というスローガンが掲げられていた。飛び越えてしまったためにほとんど経験することのなかった資本主義に向かって、人びとはいま試行錯誤を続けている。そんな世情を映した流行語がある。

モンゴル語で「ヌフ・マルタハ



タルバガン。ソロングド・バ・ジグムド「モンゴル医学史」より。

(穴を掘る)」という表現が巷で耳につく。この穴とは、草原のあちらこちらに散見される、タルバガンとよばれる草原モルモットの巣穴をさしている。

モンゴル人の多くがタルバガンの肉の風味をことのほか賞賛する。また、その脂肪は皮膚によいとの評判である。タルバガンの掘った穴、それはいわば安住の地であり、したがって穴を掘るとは安住の地を確保しておくことを意味する。

モンゴルでは、新内閣の成立後、局長クラス以上はほとんど総替えされた。人びとは、知り合いを通じて

別のポストに就くとか、新しい会社を自分で創設するとか、さまざまな手段を講じて生計の道を確保しなければならぬ。そうした営みのことを「穴を掘る」というのである。重要なポストに就いていた人びとが追い出されても涼しい顔をしているのは、肩書のあった時代に、不正をしてでもちゃんと穴を掘っていたからである。

市場経済化への大転換という混乱の時代にあたって、人びとは利己的な行動に終始する傾向がきわめて強いように思われる。そんな行動を描いた言葉である。